

紙媒体の生き残り

～アナログとデジタルの共存関係を中心に考察～

1130517 山脇 知実

高知工科大学 マネジメント学部

1. 概要

日々大量に出版される本。しかし現在販売量は伸び悩んでいる。その原因として日本の出版流通システムの限界が浮き彫りになっている。

そこで、まず現在の日本の出版・流通システムの現状を把握し、問題点を洗い出し、インターネット書店で本を売るアマゾン事例を事例に研究する。本と書店の存在意義とデジタル化の弊害を明らかにした上で、紙媒体の生き残らせるためのアナログとデジタルの共存関係について考察する。

2. 背景

インターネット社会が到来し、何か知りたいことがあれば検索機能に頼り、娯楽コンテンツの増加も相まって、本を手にすることが少なくなっている。また、2010年には電子書籍サービス市場が640億円にも上り、「電子書籍元年」とも言われた。本格的な書籍の電子化が始まり、ますます紙媒体としての本という存在が遠くなるのではないかと懸念されている。一方で、インターネットショッピングサイト・アマゾンはその独自の画期的なシステムにより、書籍販売で大きな成果を挙げている。アマゾンジャパンの本の売上高は、推定2000億円以上と、2位の紀伊国屋書店を倍近く離しており、今や「日本最大の書店」となっている。現在の出版・流通システムは1970年代までの書店事情を前提としたものであり、70年代後半以降に起きた多様化は、おそらく想定外のものであるだろう。70年代以降、新形態の書店が次々誕生している。¹⁾また、ブックオフにはじまるフランチャイズシステムによる新古本屋の増加、新古本産業の急成長も忘れてはならない。

アマゾンの例を見てもわかるように、インターネットショッピングが徐々に我々の生活に欠かせないものとなっている。経済産業省の調査によると、eコマース市場は1998年の645億円から、2011年は8兆5000億円に急拡大。一方で全体の小売販売額は96年の148兆円をピークに、11年は134兆円へと低迷を続けている。²⁾ネット通販が実店舗の市場を奪っているといっても過言ではない。

現在、書籍は紙だけでなく、電子化もされインターネット上で配信されている。電子化は本をそのままコピーしたものだけ

に留まらず、様々な機能を付け加え、コンテンツ化している。また、電子書籍という形は紙の本に比べコストが安く済み、現時点で市場は拡大を続けている。

3. 目的

アマゾンの例のように、一見相反するように思えるものを共存させることで、衰退している本というアナログな存在を生き残らせることができる。このことから、本と電子書籍、インターネットショッピングと書店の棲み分けを考えていくなかで、今の時代に合わせた本づくりと流通を考える。結果として紙媒体の生き残りにつながるような戦略を考察する。

4. 研究方法

はじめに、日本の現在の出版・流通システムの問題点を出版業界と読者の現状を照らし合わせて明らかにする。次にアマゾンを事例に挙げ、アナログとデジタルを組み合わせ成功した理由を探っていく。そしてそのような現状の中でどのようなあたらしい出版が出来るかを流通と本という立場から見ていく。そこから湧きあがってくる人間にとっての紙媒体と書店の存在意義を見つめ直し、デジタル化の弊害を考えることでアナログの価値を見出す。最終的には本がこれからデジタル社会の中でどうすれば残っていくのか、共存の仕方を考えたい。

5. 結果

5.1 現在の本の流通について

出版業界の現状としては、近年の金融不況や娯楽コンテンツの増加なども相まって、出版物販売額は1996年をピークに毎年下がりを続けている。しかし、新刊点数は1997年から10年間で1万点以上増加するという、新刊洪水の状況にある。なぜ、新刊点数が多いにもかかわらず販売額は減少しているかということ、本を置くスペースを確保するために書店が大型化したことと、ベストセラーしか売れなくなっているということからである。その根底には日本の出版業界のシステムに独特の再販制と委託制という制度がある。この再販委託制によって書籍の定価販売、返品可能が約束となり、その制度の下で配本と返品を繰り返し、出版社、取次、書店を自転車操業的に運営している。結果として、出版という業界全体が大量生産・大量消費という消費者社

会を生み出してしまい、このシステム（再販制・委託制）は限界を迎えてしまっている。

5.2 アマゾン日本出店のインパクト

アマゾンは世界一のインターネット書店であり、インターネットショッピングを人々の生活に根付かせた立役者である。そんなアマゾンの成功の裏にあるのは、顧客を売り手の思惑で誘導するのではなく、買い手の思惑を先読みすることによって顧客の購買行動を支援するという考え方に基ついて行われるサイト内のシステム構築にある。立ち読みできないインターネット書店の弱みである情報量と質の確保に特に力を注ぎ、リコメンデーション機能とアソシエイトシステムなど独自のシステムを自前で開発している。そのようなシステム作りへの設備投資に力を入れることで、アマゾンのサイトの品質の高さを保持している。また、アマゾンの送料無料は日本の再販制を実質的に崩したと言われており、これが出版社、取次、書店に影響を及ぼしている。

5.3 新しい出版のかたち

明らかになったことは、時代にそぐわない現在の制度を変えていこうとする動きである。一例として、ソーシャルネットワークで出来上がったコミュニティを利用した販促活動を行い、著者が自ら取次や書店の役割をするという出版形態があり、時代に合わせたライフスタイルに溶け込ませる形で提案するという販売の仕方が実践されている。

本自体も変化しており、その代表的なものが電子書籍である。電子書籍といっても、ただ紙の本を電子書籍で表示させたものだけでなく、アニメーション・動画・音楽などを取り入れた一種のデジタルコンテンツとして発展している。本の購買形態も紙オンリー、電子オンリー、紙+電子の3種類が存在する。^[3]

5.4 人間にとっての紙媒体、書店

まず、紙である強みは五感に訴える力がインターネットとは異質なものであるということ。また、価格面でも電子書籍専用端末などの初期費用が必要ない分、安く手に入れることができる。時代の流れに伴って本そのものが変化しないことも重要なポイントである。

書店の本来の役割とは、本の個別性と向き合い、客＝読者の個別性と向き合って本を手渡すことにある。^[4]しかし、現在でも実際に手に取って立ち読みできることが書店の一番の魅力である。

本のデジタル化の弊害については、電子ディスプレイの場合、小さな文字に対して精神的負荷が高くなるということが分かった。また、紙・運送費などの出版コストがかからない為、本が作成しやすくなり、さらに本の取捨選択が困難になることも予

想される。電子書籍は物理的な本体を持たない為、データへのアクセス手段がなくなった場合や、データが消えてしまった場合に何も残らない可能性が高く、永久的な保存がかなり難しい。

6. 対策と提案

これらの調査からわかったことは本などの紙媒体（アナログな存在）はデジタルの力を利用して、生き残ることができる。また、アナログとデジタルはうまく共存していける、ということである。現在の出版不況は電子書籍の普及によって圧迫されたものではなく、時代の変化に沿って変えられていくべき出版流通システムが限界をむかえていることにある。本と電子書籍は全く別の質のものとして、それぞれの文化を形作っていくだろう。新刊洪水で消費者社会に変容した今こそ、本の質をデジタルとは違う格へ引き上げることもできる。

また、流通システムをインターネット書店のようにデジタル化することに関しては、アマゾンのシステムのように、膨大な数の本をインターネットの検索力ですぐ探し出せる形にしたり、評価が見られるシステムを使い、手にとる情報の質も高くすることができれば、さらにインターネット書店の需要も高まるだろう。消費者社会の今だからこそできる流通のかたちである。リアルな書店とインターネット書店がそれぞれの特性を生かし、手を組むような協力関係になれば、ますます読者にとっても利用しやすい書店となるかもしれない。

7. 今後の課題

時代の変化とともに変化していくライフスタイルに合った流通方法を実現するためにも、出版業界の保守的な体制を改め、制度を変えていく必要があるだろう。インターネット上のデータの半永久的な保存の確実性も高めていかなければならない。

今回、紙媒体が社会にもたらしてきた文化的な背景や脳への影響について、さらにインターネットを利用することで本を手に入ってきてしまうことが社会にどのような影響を及ぼしているかについて、十分な研究が出来なかったが、今後特にこの点は考察する必要がある。

主要引用文献

- [1] ポット出版『本の現場 本はどう生まれ、誰に読まれているか』永江朗、p. 152。
- [2] 東洋経済新報社『東洋経済 新・流通モンスター アマゾン』p. 60。
- [3] 川村俊之、山田尚「電子ジャーナルの普及による雑誌購読モデルへの影響」情報の科学と技術 59巻6号、262～267(2009)
- [4] 新潮45 第31巻第2号『本屋は死なない』新潮社、2012. 2. 18。

